

大火に挑む(1995年3月号掲載・魚住 好司)

はじめに

阪神・淡路大震災は、一瞬にして尊い多数の市民を犠牲にし、また長年培ってきた貴重な財産をも破壊し、まさに神戸の中心を廃墟と化してしまいました。特に長田区内では、地震直後に少なくとも10カ所を越える同時火災が発生し、更にその日に計17件の火災で50万平方メートルを超える面積を焼失した様は、終戦直後に疎開先から神戸に舞い戻ってきたときの焼け跡の姿を思い起こすものでした。

この震災は、先輩諸氏が戦後50年の歩みと共に築き上げてきた神戸消防の信頼が一瞬にして崩壊し、消防力の限界をまざまざと見せ付けられた思いでした。

ただ、この窮地に国内の多くの消防関係機関はもとより諸外国からも支援をいただいたことに深く感謝しているところです。

地震直後の状況

寝ていた体を「ドーン」と突き上げる衝撃、その後に引き続く複雑な揺れに「我が家は倒れる」と覚悟を強いられる想いでした。隣室の娘に「頭から布団を被っておけ」と言いながら自分はタンスが倒れないように両手で支えていました。

私は和歌山の疎開先で昭和 21 年の南海地震を子供心ながら初期の「ガタガタ」という揺れの後、暫くしてユサユサと大きな横揺れに「怖い」と言って母親にしがみついた記憶がのこっており、また消防に入る前に勤めていた東京で新潟地震(東京で震度 3)を、昭和 58 年の日本海中部沖地震の直後に秋田の友人に「防災の参考になるのでは・・・」と誘われて秋田市を訪れた際にその余震の震度 4 に出くわしましたが、平成 7 年兵庫県南部地震はそれらと全く異なる揺れで、縦波と横波が同時に到来した、複雑な揺れを感じたところです。即ち、震源地の近い、『直下型』と呼ばれる特色を現していたようです。

揺れが治まってすぐに懐中電灯を取り出し、各部屋を点検したところ家具や什器類が床に散乱し、足の踏み場もないほどに壊れているのを確認しただけで「すぐに消防署に行くから後は頼む」と家内に言って、衣服を着替え、顔も洗わずにマイカーで職場へ向かいました。

街灯も信号機も消えた暗闇の道中、橋やトンネル等の崩壊による通行障害が頭をよぎりましたが、「行けるとこまで行こう」と自分に言い聞かせて西神から山手幹線をヒヨドリ方面に走らせ、長田区の高台、大日が丘付近に差し掛かると空も少しは明るくなり、紀伊半島の山並みの輪郭が見

通せるようになり、さらに長田の市街地に目を移したときに七条ほどの狼煙が真っ直ぐに立ち上がるのを見たときは、「今のうちに消してくれ！」と心の中で祈りながら車を走らせていました。

市街地に差し掛かると道路のアスファルトは捲りあがり、倒壊した家屋が道路の半分を塞ぐなど、揺れの物凄さを目の当たりに見た思いでした。長田神社付近に差し掛かると二階の窓から煙を噴き出す火災現場に通りがかりましたが、住民が窓に梯子を掛けて向かいのビルから消火栓のホースを延ばしての消火作業中でしたので、後ろ髪を引かれる思いで車を消防署に進めました。

長田消防署の初期対応

長田消防署の本署に辿り着いたのは6時15分ごろだったと思います。消防車両はすでに出動しており、マイカーを地階の駐車場に止めて3階の事務所へ階段を駆け上がりました。平素は容易に開閉できる事務所のドアを慢心の力をこめて開けると、室内は書棚やロッカーが倒れ、机等が大きく移動し、更に書類等が足の踏み場もないほどに散乱していました、作業服に着替えるべくロッカールームに行きましても同様の状況でしたので隣室の署長室を借りて更衣したところです。

署長室の窓から消防署の西側を流れる新湊川の対岸に位置する工場(川西通)から黒煙が吹き上げており、丁度そのときに川に部署した可搬式動力ポンプのエンジンが作動したところでした。

また、北西約 200 メートルのところ(大道通 2 丁目)からも黒煙が立ち上がり、更に西遠方に目を移すと 2 箇所(鷹取商店街方面と西代方面)から黒煙が立ち上がっており、「須磨管内であつて…」と不謹慎なことを願っていました。

作業服に着替えて 1 階の情報通信室へ降りていきましたが、ガレージに出るなり多くの市民に取り囲まれ「壊れた家の中に人がいる。助けに来てくれ」という救出要請情報が私のメモに 30 件以上記載されていました。

咄嗟に通信室に残留の通信勤務者に向かって「(水防)倉庫から道具を出せ！」と大声を発し、集まった市民の皆さんには「消防隊はすべて出払っています。道具は何でも持って行って、皆さんで協力して助けてあげてください」とお願いしました。ガレージに並べたスコップやバール、杭、ロープなどはほとんど持って行かれ、更に「バールをもう一本貸してくれ」との要望に、予備車のそれも貸し出した後だけに「通行中のトラックを止めて借りてください」と途方もない返事をしてしまいました。倉庫には水防用資機材が主に備蓄されており、救助用資機材となれば皆無に等しい状況でした。

その後、早々に出動してきた職員を救出要請のあった現場へ出動させましたが、満足な道具も持たせることができなかつただけに彼が帰署するまで不安に駆られたところです。

火災についても「東尻池 7 丁目で火事だ」「重池でアパートが燃えている」と相次いで駆け込み通報があり、通信勤務者に「(消防)本部へ連絡せよ」と指示しましたが、彼からは「本部は『署所で対応せよ』との指令です」との空しい回答に、なす術がありませんでした。

作業途中に出勤してきた署長に状況を報告すべく署長室へ行き、報告を済ませて対応を検討しているところへ中隊長が現場から一時帰って部隊の活動報告を受けました。

彼の報告によると、地震の揺れが治まった直後に当直職員を屋外に退避させ、署前の広場に出たところで川西通と大道通から火炎が上がるのを発見、直ちに本署の 4 隊を二手に別れて出動させ、その後に通報のあった菅原方面の火災も本署からホースを延長して対応している、とのことでした。

また大橋出張所の職員も同様に近隣の火災を自ら発見し、同所の救急隊もポンプ隊に乗り換えて 2 隊で対応しているとのことでした。

現場に駆けつけた各隊は、当初水道消火栓に部署したが、数分で水が途絶えたため、河川や防火水槽に部署しているとのことでした。勿論、彼は火災発見当初に本部に第二出動(部隊の増強)を要請したが、本部からの『署所で対応せよ』の無線が最後で、その後の無線交信はできなくなったとのことです。

ただ、彼の報告が終えた後は、管内図に火災発生場所を記すのみで、現場へ出動させる部隊もなく、歯痒い思いをしたところです。

午前 8 時ごろから市内の他の消防署から支援を受け、更に 10 時ごろには消防艇の出動をも要請したところですが、それでも部隊を投入できない火災現場を抱えていました。

三田市消防本部からの応援隊を 11 時ごろに受け入れた段階で、所属内の中隊長クラス全員に火災現場ごとの方面指揮を指名しました。指示された中隊長の中には当該火災現場が鎮圧する翌未明まで食事もせずに頑張っていた者もいます。彼らには、現場での統括的な指揮と部隊の安全管理や延焼阻止線の設定等に加えて小隊長の指揮・判断を補完することを期待するものでした。

応援隊の活動



地元隊は、防火水槽の水が尽きると転戦を余儀なくされており、更に「学校プールの水もあと僅か」との報告を受けたときは海又は河川からの中継送水しかないと思っていたところです。

昼過ぎに「大阪市消防本部からポンプ、タンク隊が 10 隊来ました」との報告を受けたときは、躊躇することなく『水利は海、○○方面の火災現場』にて出動をお願いし、その案内誘導に当署の職員にさせたところです。

また、その後に応援のあった他都市の隊にも長田港に停泊する消防艇を拠点とした中継送水体系をお願いしたところですが、消防本部が異なる混成隊が連携を組むとなりますと、いろいろと問題もあったようですが、落伍する隊もなく翌未明の鎮圧状態になるまで消火活動は続けられました。

勿論、タンク車で応援のあった他都市隊の中には、海岸と現場をピストン運転してくれていたとの報告も仄聞しています。

なお、大阪市消防局は、第二次の応援として更に 10 隊があり、彼らは署前の新湊川からの中継送水体系で消火活動に取り組んでいます。しかし、その下流に部署して消火活動を行っていた当署の大橋隊が「放水途中で水枯れをして、更に河口の方面に部署替えを余儀なくされた」と報告を受けるほど水量の乏しい河川であったことが伺えるところです。

西および北消防団からも応援を受けていますが、特に西消防団は西区内の七個支団が揃って応援に駆けつけていただき、その案内役に長田消防団自ら買って出てくれました。しかし、出動した現場で付近住民から「今頃何しに来た」と罵声を浴び、殴られそうになったとのこと。当該火災現場では、消防団員が駆けつける前に 100 名ほどの住民が協力して道路下に埋設の 40 トン防

火水槽が空になるまでバケツリレーを行っただけに、「消防団の駆けつけが遅い」との怒りを受け
たようです。住民の皆様はもとより不愉快な思いをさせた消防団の皆様には、不甲斐ない私ども
への『お叱り』であり、深くお詫びをする次第です。勿論、消防団の皆さんも翌朝まで消火活動を続
けています。

ただ、火災は 18 日未明にはおおむね鎮圧状況を呈していますが、一部の地域ではその後も再燃
を繰り返し、19 日未明まで放水を継続しているところもあります。

震災当日を振り返って

この度の地震は、神戸市内で当初「震度 6」と発表されましたが、市内の某事業所の震度計で
400 ガルから 700 ガルを計測されており、また長田区内の市街地の家屋の倒壊状況等からして
後日に現地調査に来た気象庁職員に「これが震度 6 ですか」と素朴な質問をしますと、彼は「その
ために調査している」旨の回答があり、その翌日に「長田区は震度 7」との修正報道がありました。

その震源地につきましても「淡路島北部」から「長田区の可能性」をも示唆されるなど、情報が錯綜
し、また、防災計画中にも震度 7 を予想していなかっただけに苦戦を強いられた思いです。

家屋を全壊した某長田消防団員が「ドーンと下から突き上げられ、寝ている体が宙に浮き上がり、
畳に叩きつけられたときに家がグシャと潰れた。2 階に寝ていたので助かった」と話してくれました
が、直下型地震の、縦揺れの特徴を顕著に現していると思うところです。

今回の大地震による火災の出火場所及び原因等の特定は非常に困難な状況ですが、従来の地震による火災として警鐘していた「朝げ、夕げの火の不始末」や「暖房等の火種」等とは限らないことです。

すなわち、当日発生した長田区内の火災の多くは、一口に言って『都市エネルギーの爆発』と思うところでは。

最初に立ち上がった炎が『ガス火』という情報が随所で聞かれましたし、その日の夜 11 時ごろに火災現場をパトロールした際に燃え尽きた現場で配管からガス火だけが無数に立ち上がっていました。

ガス会社の関係者の説明では「長田地区は 17 日の午前 11 時にガスを止めた」とのことですが、その 12 時間後も当該区域内を網の目のように張り巡らせている配管内の残圧が、折れた配管部から炎として立ち上がり、それが燃え尽きたときに大火が鎮圧状態を呈したと思うところでは。ガス会社の説明では「一般家庭の引き込み管にはガスメーター内の感震装置が作動し、ガスの供給は自動的に止まる」とのことですが、確かに現場で配管の先にメーターが付いているものからは炎は立ち上がっていませんでしたが、炎を立ち上げる配管の先にはそれを見ることはできませんでした。

また、消火用具を貸与されていない長田消防団員が「倒壊家屋から救出活動を行っていた午前 10 時ごろに街頭や自動販売機の照明が点灯した途端に近くの某作業所で『ボーン』という音と

もに火がでた」と言うことでしたが、同じ時間帯に他の工場でも同様に街灯が点灯した途端に工場内から黒い煙が噴出し、関係者の駆け込み通報があったところです。

電気につきましては、その後の普及工事で、個々の家屋内の点検をされずに通電したために出火したことは新聞にも掲載されたところです。

ともあれ、長期かつ過酷な現場活動に早々に応援に駆けつけていただいた他都市の職員の皆さん、はじめ当署の職員には、改めてお礼を申しあげる次第です。特に、遠方からの応援隊には交代要員もなく長期間にわたって支援していただき、また職員の少ない消防本部では神戸に精鋭部隊を送り込んでいる間に地元で同時火災があり、残留部隊が難儀した等のお話を聞かされたときは、神戸の職員だけでなく派遣する側にもいろいろとご苦労があったことを改めて教えられたところです。

また、当署の職員は、大なり小なり被害を受けながらも「家族と数日間、連絡が取れなかった」との声が反省会の席で聞かされたところですが、現場活動に没頭してその方面への配慮が欠けていたことに深く反省した次第です。